復興馬九いけ 新聞

馬を九頭描き、記し、「馬九（うまく）いく」との願いが込められた作品にちなんだ題字。

走り駒、二重構造、青ひび
大堀相馬焼伝統の技術

大堀相馬焼の伝統的な作品（右）と二重構造の断面図

女性向けにかわいらしいイチゴがデザインされた器

大堀相馬焼松永窯は、東日本大震災と東京電力福島第一原発事故により浪江町から避難し、西郷村に仮工房を設けて伝統工芸品を作り続けている。放射性物質の影響で浪江町の原料が使えなくなったり、町の窯元が散り散りに避難するなどの苦難を乗り越え、新たな客層向けの商品開発や東京五輪・パラリンピックの大会公式ライセンス商品制作などに励んでいる。同窯代表の松永和生（かずお）さん（70）や妻の京子さん（67）らに、再起するまでの経緯や今後の展望などを聴いた。（取材班）

松永窯　若者や女性向けも

大堀相馬焼には、走り駒、二重構造、青ひびの三つの特長がある。

走り駒は、大堀相馬焼にはかかせない。左を向く馬の絵のことで、この馬が左を向いているのは「右に出るものがない」という意味がある。

二重構造にすると、普通の陶器を作るよりも長い時間と労力が必要だが、その分メリットもある。まず、熱い物を注いでも表面が熱くなりにくく持ちやすい。さらに冷たいものを注いだ時には水滴が外につきにくいという。

青ひびとは、独自のゆう薬によって、あえて作品にひびを作る大堀相馬焼の伝統的な技法だ。また、このゆう薬には、作品全体を緑色にする効果がある。

松永窯では、これらの伝統的な特長の陶器を残しつつ、若い人や女性に好まれるデザインの作品の開発にも力を入れる。イチゴなどかわいらしい絵や、わざとひびの入らない粘土で作ったカラフルなカップを制作。８頭の馬を描き、底に馬という漢字を記して、「馬九いく（うまくいく）」とかけたユニークな作品もある。

なかなかひな人形やこいのぼりなどが飾れない人のために、陶器で小さな品も作っている。

松永窯で制作している陶器は約50種類ある。合わせて月に３０００個ほど作っているらしい。

また、松永窯には電気窯が１台、ガス窯が２台あり、作品の色によって使い分けている。（佐藤歌音、生田目陽源）

復興を世界に発信
ぐい飲み、五輪公式商品に

東京五輪・パラリンピックの大会公式ライセンス商品に認められた大堀相馬焼のぐい飲み

東京五輪・パラリンピックが来年開催されることに伴い、大会公式ライセンス商品に大堀相馬焼のぐい飲みが認定された。松永さんは「他の産地にはない大堀相馬焼の特長を世界にＰＲしたい」と意気込んでいる。

「大堀相馬焼のぐい飲みで福島の金賞受賞の地酒を飲んでほしい」とも語る。ぐい飲みは３種類あり、中の形がそれぞれ違う。飲みたい酒により使い分けることが可能。

公式ライセンス商品には、白河だるまも認定されており、２つの特産品を通して福島が復興する姿を世界に伝えていく考えだ。

代替原料工夫し入手
放射性物質影響　浪江産使えず

原発事故の被害は松永窯の作品の原料にも及んでいた。ゆう薬に使っていた浪江町の砥山石（とやまいし）は放射性物質の影響で使えなくなってしまった。

松永さんは震災後、避難先を転々とし、現在は栃木県那須町に避難している。２０１４（平成26）年４月に福島県内で最も那須町から近い西郷村に仮工房を設けて再開した。ただ、浪江の砥山石の代替品を作らなければいけなかった。そのために、県ハイテクプラザで浪江町の石の成分を分析してもらった。

浪江町の砥山石と成分の近いものを使用するため、現在は海外などの８種類の窯業（ようぎょう）材料をブレンドしている。費用面でも原発事故前より負担が増えるなど苦労があるという。

また、本体に使う粘土についても震災前は地元のものを３割ほど使っていたが、現在は県外のもので対応している。全国から大堀相馬焼に合う粘土を探してくるなどの努力をしていた。（永山栞）

松永窯では、震災前までネットによる販売はしていなかったが、長男の武士さん（31）がネット販売を始めた。他にも、東京・日本橋の県のアンテナショップ「ミデッテ」、県内の高速道路のサービスエリアや道の駅などでも販売し、大堀相馬焼の良さを広く発信している。（関山翔太）

原発事故で…「大堀相馬焼は近い将来なくなってしまうのでは」

作品にゆう薬を塗る京子さん（左）と和生さん

技術継承に力
松永窯の和生さん、京子さん夫婦

「大堀相馬焼は近い将来なくなってしまうのではないか」。松永さんは悲しげな表情で不安を口にする。

現在、大堀相馬焼の窯元は原発事故により浪江町から各地に避難している。後継者の確保や伝統技術の継承が難しくなっているという。松永さんはこの危機感から、町の地域おこし協力隊員やインターンシップの学生を積極的に受け入れている。また、京都などの学校に出向き、大堀相馬焼の魅力を自ら伝えている。

「若い世代にはまず、大堀相馬焼に興味を持ってほしい」。松永さんは学生や協力隊員たちが伝統技術を受け継いでくれることを願っていた。（辺見希実）

私たちが作りました

（前列左から）
辺見希実（会津ザベリオ高２年）
佐藤歌音（睦合小６年）
永山栞（柏城小６年）
（後列左から）
関山翔太（白河二中２年）
生田目陽源（表郷小６年）